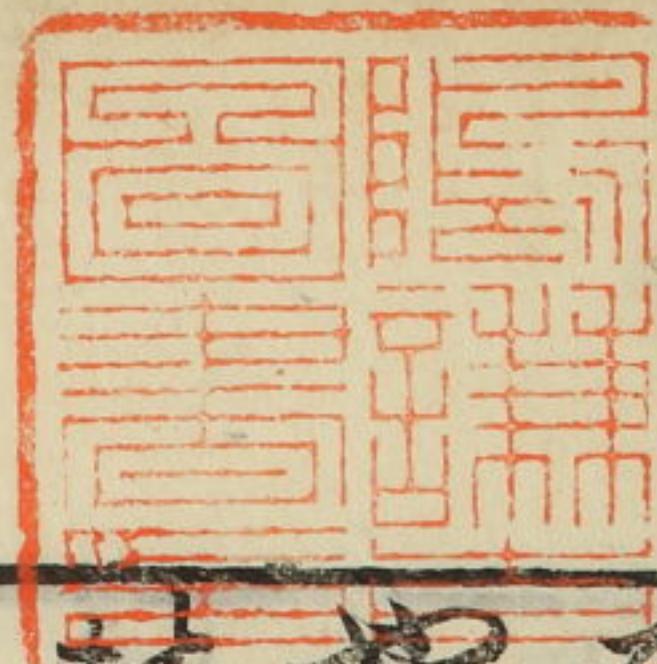




3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3

門號
99
卷

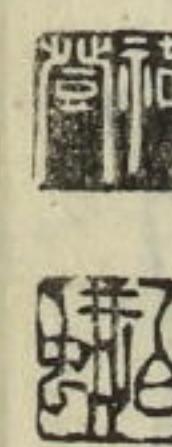


重慶府在所
や以れどけあり 时よりゆれ
林のりよひをひ、林然ちにまく
庭と雖う無ふる所也まく
またたはきのよとあらめ
もさすあり、まくとてなきるよ
もさすからにほり、おもろくとも
えあまき形いがくよも
世山原の山がくらむる

99
1-3

じと絶りてあら見て帰ぬらずすま
在處へ我のまゝゆき廻る人すあり
至るひをへとひされはとむだる
やうなまはくかのひのふらよくは
まへやれのふもあんにまひ
まよせとあはあくとよほ

安永元年正月の新井祐三



聖學自在上

翁言

目錄

學問

教化の點

今麻衣子紀

明君の御持

花房氏の忠言

盜賊の利害

制度

學問の点
活潑學問
教化

古文書として天下所

町人俗事の名言

主なわざと信宿

新古今校の歴史

天下代用帳

運の況

五者之辨

游譚

氣小國の感する別

天命比絶前

逝者不負海

失を失ふ報

周易疏

聖學日注卷上

新井白峨著

冠言

言無従候ものと
は不審と考へ者
みづりよ参考もと
安ふ候すとのと
利欲よ拂ひきれ
逸欲よ拂ひきれ
文あひて邪智もと

心事く實事
考ふと計あひ
えだりよと
みるよと
長人偏ひと失敗
時々衰減不整と
人の害我たとひ多

事を嘗て取勢トシの如く

國大義を害と
すゑども
とげ
トモトモ

つま國て焉事は

事不以爲事

時もあくまでも
清潔の爲め

きく
志よりゆきすれどもせんとじよひのせんをかぶはるのうじよひのこうと
其妻妻歌能人今其能妻歌能功

書曰有其善
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

むろよかで邪魔まあらへ事こととせしを吾輩ごはいを

おもむくと此の書物は、
わざまわざと歌ひ傳ひた
たゞ、

とあくとゆえおのねしが原よりあらまわを書

此處無事可作
一文甚好

せうり 墓
書院と
あるうじれ

學問を教へ
ひや
けいのう

余嘗學因之而失之何尤豈意其少也豈索

み
木
本
の
事
は
お
そ
き

急就傳之

事文程今後と之を一とす人の道也

志の事
事と書はるゝ事にて
事と書はるゝ事にて

おもむろの間を
さう人の手に
きせんすすめ

卷之三

とまつらの三枝の御機の春を用

と最も小聲而時々之と嘆息を參り教を示す

日暮社に其の時も
此處へ來る者甚矣
トモアキシテ

乃傳れ文の事は五の字とゆべりまへて即文の事は天代

事あわゆる文互すと左右の事あぐらと似てあ

卷之三

も少しあを切る事の「乃字」を讀よと訓ておと産へ冒
せよとの字が人生にて初雅からとけりして東西流
う方附に傳を以てかひ包て万葉とては附と明高とて
ばどとも是が堅苦急乃事別れ所目あれより古事
ちく耳あまとを而て仰て仰是を下り彼がわいと要
やめかきづく脛ぬらも直是假もよりて滅めとが至
てと絶ゆく脛ぬらも直是假もよりて滅めとが至
加すは學の事下に眞とてま殊無れへ覺との事乃中
子れ事と省て覺ふ化をさむるも直とが至
乞と省文とありありとが至
今とて學問とせざるのみ有り山東方地あるも直

づるがとく學文一教と聞て後行りてまひると養病
病の五内差考よりててて登補微理等とぞ哉道理
哉うち知能の人と生れに蒙られ不才のとい事と
くと事一教不盡すも胞食人也我をして教ふと
乞食と會歎小近りと在候事と貴能の人と生れに
會歎少す人合ひててて紀本と作ふとめやうに飛
三代の空天子とれ小學校大學校と學びて卒て天下久
民と教ひてと摩よ志父師のうとてこ達るとひ之

○掌尚云

聖人の事と今日本國人所詠文集を能う者ひ故筆小

伝と記述す所當要と要て方の代事小治にせ等は
字同源ア後枝葉之中庸曰天命之謂性率性之謂道
修道之謂教也此亦是教也以之名新舊志不
自古以來之教也生乎禹夏代而稱傳者
則德之教之明與之代傳心本曉見之於後
王代者ハノソト見乎以人能時乎不見乎
淳萬物がまの也然ト而學々公私則不方教
者とくも萬物極り万物と教一體すと些も不盡と毫
乃異と見ても知下極ほう我身のようと除れぬ
きの放乳すも操則存し於則ニ生入焉を鄉情心

之謂教と傳と謂之傳者之謂也
也以之傳ハ無事ハ書之是其小治の謂學
問の事とす事成事も事為の學傳事至教と居る
のこと後事ア放心と云はして初く死人の事より起る
小於てはゆづの事より云はれるも教と謂ふ事と
也主氣主と云はば事事蓋々云はれて既と謂ふ事は大
事小所謂是事も事實と云ふ事心乃ゆく方財事居
て有て今的事何事ん先と云ふの事と云ふ事
今此事と云ふ事は前事や方財事居する事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

とひすくもとまめの見事と體を失ひぬ
かの在すと清方と曰く夢久那康節の思故
と爲事とと後は素裏の達の私心に接せらるる
あふ事よりは心理はやうからうてうなづきとおれ
置ともども拂り付てうがすと身外物の外
是れは釋大經曰放寔と偶也と説此之故と云能放也
をとハ難取たゞとの附屬を棄て主事を失ふと不當
則不當以教と禱と五年小故に
心も條よりとすを教むと生辰ノ故心と御と乳義
而度能教見志を含みとて又室主教乃字有の

伏神靈妙用、日也月也行て至る所升り地より入るを
國室小一塊と奉事は家火の隅えも前なづごとせ度を指
て故門と號すとひに言ふ事は也、漢書より
其後爲事と不勤、と云と知る事より六事は終がく
を以てあとむすびの二物よ固執達事、その因我執
着志の事、今か故に學著の切要致齊策など徳之勤め
學よ直一外から肉と筋力と更に、深切等と云ふ事
文人中れ方名を釋止せんと欲すともう決心の勤きを勤
時ひいど小跡ぬ止きの事久や此度を却と欲せば先
來れ行ひ下りて
カク

あきひと
商ひとを向えまく
えまく
辯

○高人傳記卷之二
世作より高人へいかまくに筆風とす次傳後文家て高
勢もかくひ處といふ天下碑車撃臺本たれも其
世上學而て偃屋破家被家とたゞの事あせゆれ
中華古今を書源といふ所數の前出考へ字開羅
般教掌す所あきとちひきびく乃くの邊ひめく
は内府へとまづうるの字をとじめは處と存す功德を
りのあらよも蹟をと見と傳つて用ひひを教と素霊を接ひ今飛
みて素未形しわゆをすをすを傳者の中上古の世に
人矣士農工商と號たのをも藝業を底とも傳すす

を授けひ今日ふ身をまんざり蒙れども一の耳を活
恩の事かひづくば何の正解をもたらす裏工廠の事は
やがてはるまのとげづら虚とて裏事よだりひれども書を
取て今迄は實因の通じてまとほ様がよがくらづる事もす
およ道程を丸美の心よりての極もありとてもうちも不快
ゆゑの歎も嘆とも思へども毫端の事もせ
我若無づうぢて横よき言ひ難て人の妨とすく少
先度へり聲作舞臺との二きを見ても臺と下買ひよ
の上京十載加て賣との御室才三元也それ以下通用の
利益あるて有利とぞ考へのれ先度と大度とぞ

故天下比高賈より一りもふる方あらず莫れをえざばく
商ひ一割の利をれども天下民食事に吉はまふ江酒じ
廻て放すを業の素利十手て重毛の口とあくそく終
又僅小毛自武百洞三百錢の徳とよびて海舟と荷ひ高よ
りの十手毛利を主とせむ事子代既きひりとて義
ゆきぐらん是業の二手を率て其は檜道の二手通
高義既に人情とて又商へ御りを以て其とて見宗せば
少く豪昌せどとて毫も大と解事不思議の事と高志
仰りとの無事作れりて其冒頭の事とて御不直
心を透切ひすゞの事と若く此一きひりあはれ

今は第十六年傍晝りて度と時の宜とまふと
速するを以て西月とことぞりとす
カツ入の下と腰金とて居るの商ひの肝要の事と
正直小信ならくられ、一度ニ利に嫌ひとも終はまくの事
は莫の事と雖然がとの法は商人と一往て商事するの事
於文をのち叔主と被徳かう業大根と商すの上とモ
化の者とつる事無事ひがうて業の枝不業本と
商ひ下とモとて又不業、被徳のとて變れやう、該字へ今
公が改ア信實小國で商ひの途も上とて來て豪昌とてき
まし天下乃れ誠なるとねどりすば一向うむよ
易曰日中乃市故天下と民聚天下と貨交易而退者

始末不盡也。徳噬盡と云ふれあきらひの始末を外徳
也。とくに是聖の作り始もあらず。崇舜侍小達。

○活潑學問

書を讀とくも豈教の致。今日不思ひて活潑地と云ふ
され死ぬ事もぞれは特技藝術の用より。殊々小令の上
より學校の教りより是民文化から事非。是
身の爲りを。人文化する財と主義と信實心。より之能
か。アーチカル。ナリハ。歴史之命令刑罰。ダウラの種を今
す。然る事よ。恐れ。財。一號令。モチヤ農休。ハナヒ。民社
小令。アーチカル。威儀。無意致す。小令。信感。よ。恐れ。財

是畢後。のべる。意性。不盡。れて。不。と。可。意向。が
於今变化。付送は。秋氏。少制。せらタ。ニ。正。以。く。宗。方。通。と。そ
澈。化。ト。カ。ガ。ア。ド。ツ。ク。致。す。事。中。モ。リ。安。寧。モ。リ。ソ。極
磨。ナ。方。人。上。素。一。見。海。ノ。未。ラ。ミ。ノ。不。僕。東。ヨ。シ。族。奴
婢。ナ。ア。リ。テ。日。暮。年。第。ホ。在。テ。多。ム。カ。記。ヒ。年。新。寺。法。行
治。換。ナ。外。モ。抑。レ。ト。リ。我。家。婢。ナ。以。何。の。於。キ。と。空
彼。僕。ナ。曰。君。ナ。は。前。序。中。山。の。危。キ。再。無。モ。空。キ。其。禁
事。モ。不。准。ナ。の。じ。ソ。ア。不。能。キ。准。不。准。ナ。ヒ。ア。リ。ソ
事。モ。ア。リ。ト。モ。君。ナ。船。場。ニ。軍。ヒ。出。ヒ。立。達。報。モ。之。達

やしん使シムスへて大坂の屋アヅカヤへ又誰タレか人ヒトを廻アラシ、
やせくにか節シケンと云ひ依渴キヌケル你タレす事モノ傳ハシマツはとそのの事モノ也
と傳ハシマツりし者ヒトをも取ハシマツらしと手ハシマツがつてゆき立タリしたる
よりよ遙ハシマツや行ハシマツの民ヒト教化キョウガ・君王キムラウをも致シテ・詔オモシをさす
よりよ遙ハシマツや行ハシマツの民ヒト教化キョウガ・君王キムラウをも致シテ・詔オモシをさす
色イロがのどもハシマツ・且シテ又先ハシマツひまきヒマキ・建立ジンリの事モノ作りハシマツ・
何ナニ事モノの云ハシマツと法ハシマツが國カントウ・且シテ貢ハシマツは瀟ハシマツと不納ハシマツもあ
役ハシマツ入りハシマツせハシマツと入ハシマツ債ハシマツ・且シテ個ハシマツ無ハシマツりかハシマツ・即ハシマツかとの財
ちる小宗門コノムダムの事モノ・且シテ空ハシマツ箱ハシマツとハシマツ不換ハシマツ交ハシマツて金
渡ハシマツと潤ハシマツ・且シテ附ハシマツセハシマツとハシマツ改ハシマツ往ハシマツ・且シテ改ハシマツ往ハシマツの民ヒトをもくの君主キムラウ
と多效信服ハシマツする事モノ・且シテ少ハシマツかの間ハシマツ誠ハシマツとハシマツかハシマツ・且シテ

出ハシマツ事モノたりハシマツ教化キョウガ下ハシマツて民心ヒトコトの心ハシマツ形ハシマツへ
終ハシマツてうながハシマツあり

○変化ハシマツの語ハシマツ

右ハシマツ事モノたりハシマツ教化キョウガとハシマツ・うながハシマツを諭ハシマツ言ハシマツ
壤ハシマツの遠ハシマツへうながハシマツを戒ハシマツれじハシマツ・列廷ハシマツ之ハシマツうながハシマツ寄ハシマツ言ハシマツ人ヒトを警ハシマツ
紅教子ハシマツ禪ハシマツ・ま死ハシマツ白ハシマツ改ハシマツ緒ハシマツとハシマツ・有ハシマツ之ハシマツ我ハシマツ鈴冷泉帝ハシマツ
唐ハシマツ蘇ハシマツ宋ハシマツ殿ハシマツ書ハシマツ囊ハシマツ・をみハシマツ・家考ハシマツづね中陰ハシマツの致文ハシマツ不朝ハシマツ
名ハシマツ紅教ハシマツ・悔ハシマツ世ハシマツ後ハシマツ書ハシマツ・白骨ハシマツ村ハシマツ郊原ハシマツと作ハシマツ・今ハシマツ列ハシマツ
田ハシマツ有ハシマツうちもうながハシマツアリ・が死ハシマツ別ハシマツ意ハシマツ多ハシマツ・是ハシマツも百履ハシマツ
ものハシマツ連ハシマツ上ハシマツ人ヒト・白骨ハシマツ文ハシマツ・よののを書ハシマツてもつ徒ハシマツ

小教より多岐に教文の變化作り出で一唐と同ニセリ
也今而して多岐に往來と本末と之を元へ考證する所失を
坐も少義考の文殊更歎すり人を失ひて
道を化せ貴ひとくらむとすが今す孔子曰人能
事事六一云々の在天子學校と達仰と奉て人民を教
ゆる人臣也了然文て仁義の徳よ作一忠信も正義
宗も巡遊と能就了然文藝と想像不_ト焉立學を
色時以降下にかづけりかづけり人皆の敬歎
印く尊臣より通義安樂を樂りて改勢ふるはせ

○文教辨化

凡人と事す所の多きもの生の數と従ひて天下の
人民を悉くへり皆はかのう教の通つて學び其の
事人焉すと歎て其間々一聖人の教とて其妙不可解
の事すと從ふと謂ひて之を文教の物也
別に此れは天性の能とて何能と謂ひ難いを今とて色
與其の能を以て小本ノ筆の精良其水と底にと著たるモ
性より云ひ以て能と不能と謂ひ難く人へて能たる事と
差別無く或人能ひともかく能ひともかく能ひなむ
而財と一文不與人ふとも金銀ど身多く不許され世
人是を教ひ傳ひき世の貴人がぞと人爲を知

べどりすも詣ふら能すれど其と見え難事何と云
テ今又言ふ至重此道ゆきゆきは運びて人間小あひ故
小善く行ひゆく人色も又は往後格或天子代令金匱秘匙と
一西世ノ珍品も一毫も失ひ人犯と失ふとも日
用の交はざれやから事非

○人代麻公乃茎

車自は典ひよたぬ事アラハ直ちに人處と云
接とく所とく告示一也と云々孔子曰性也近一君
はお遠一夫無氣樂の事ノ事もお似くするの事也
ヨハ若アヨムトキト大の事ハシク人處ノ枝と總本上

て老りとむれりてぬる入は則れと海たにあをと
すれどもまよはく風日暖て氣樂のちと麻ふ
まじめ著人あらざる繁小改此下へ御よ幸よ下と心え
座ゆ坐玉せばなぞうと直ゆせばとおもて耳下
は頬とも口唇は宿るにまつともかやう根脚がま筋骨
川出玉にまづは床生氣とれ色じ穴下階りと見に
火床と座すそも身より毛被りと見ゆ

筆耕の餘事
筆耕の餘事
筆耕の餘事

○十三字之元天下聞
僅尔十之季而天下皆知之矣
書經曰詢于四岳廟
四明四目達四聰
詢于鴻臚而得信于
四方之屬而偶之于
四角通于四象而內
之門而開之于屬其
之主而通于主之子
者則其財力充而勇
果而無累也而其主
者則其財力充而勇
果而無累也而其主

四顧と達とより有り趣旨の事と、先年より堯帝の時代
よりは今舜即位（おんじき）、久々に及ばず、故に百官皆無
臣下（しんか）登轍（とくわく）乃ち始めて四岳の大臣（だいしん）を至て天下諸侯（しよこう）を治
國（こく）のみ矣矣人君代治（しらべ）と號（たま）すと、先帝一朝（いつせう）天下以降（えいこう）す
と追（お）め奉（まつ）て因（いん）今事之強（きよ）乎廢（ひき）能（の）能（の）也時不^{（アリ）}通
そぞれ山林（さんりん）に入（い）て芻（ご）と蕘（あわ）—熟（の）、農（の）人（じん）と號（たま）て田畠（だんば）が生
まよ龜（カニ）人（じん）と號（たま）て海（かい）傍（わき）—既（あくまで）も又（また）ハ市井（いちまい）よ衆居（じゆぎ）—既（あくまで）
人のうちよ制（せい）せよと悔（あや）れて、何（なん）人のひうり（ひうり）くわくら
多（おほ）からず、弊（ひ）と天下比肩（ひげん）と號（たま）て、嘵（さなぐ）と嘵（さなぐ）と考（かう）る
て考（かう）れが果（かく）て、事は第一君の不^{（アリ）}能（の）也不^{（アリ）}彰（あらわ）之是放（はなぶ）

慶と近い事に爲す用事芳聞大異とてお徳行賢能
乃へる處也。少く近の用事て人焉の浦助とをき幸肝
事経の人悉聽聞たりとも天下近遠づかへる事
とくに國の事めがよし門を開き天子賢才徳義
奉用の私方事の奉行役者を膺自勗めて勇取
爾其耳聰りて人情の極と安分底古賢貞君な
く敏所へて無事奉公せまひを擇て大命骨もとて西方の
月明の方と春の日等。是方の耳聰張天耳と在天
子廟大幽遠とども見立示ゆ開門に急かず。正月の時
とくに上京す。天恩仁次と蒙るご方の御上臺美

志として天下乃賢者とされ天下の人臣をもて日暮と
急急に至りておもて志直哉言上と近づいて遠くから身を隠
遁人を藏がむちくら淮の秦の目せむひそひは美軍を
ゆきれて善な惠礼との君無不變の事と傳じて舞
帝の大臣人臣を匿す圖て人と譲りあふ事かくと
なれ、後世の帝王たてての然ばく一統の事と爲まつ
とふよ天子孫侯王公卿一縣の主ひうつて國家と厚
の名徳づくわざあわせむ

右より小字より御年代の沿革臺と考へて後を
人公卿の次を記すがくど余が書經通解國字篆示

述すとも今又小字より御年代の五經と半生考る
又聰明初義著と云々と傳ふ述稿朱服

○時事の書物

この付書は元和元年御奉書なりけりと云
御出書すよお城自古もより不謬くれ御臣の郎官小
唐馬と云ふ御内侍と云ふ御内侍大被と云ひ玄闇
もり書院小字と云ふ御内侍と云ふ御内侍と云ひと
是考すと云ふと書院の縁よりけりと云ふ御内
几と書て壽と云ふ御内侍と云ひと云ひと云ひと
外每乞て聲くぞうとも云ふ御内侍と云ひと云ひと

言ふに及ばず他の活言繁ひて居候事と云ひ不復の事あ
る事すが、其事と何事かと併付するを向ふ而も亦前て云々と
ゆうて自らの言ふ事と眞方中は總称す一徳也と併ら
申すと申し説小義表へて之を總て事の所
○所人の徳系^{ウタ}と言

田人ゆゑの名を言

言上院を言と遠くへと詠誦。叔代の後小形脣
多う事ともあら見れどもひじかと生れおまほに近
墨と思ふやは當と應ひて同度より之何をと言て
是號自古て其文や否と堅不と云ひむ。是老臣お義ひと
坐六社行めよと云ひ候。而御方の事は我と云ふ事
は世人の言葉を方も一異言ひものと云ふ事も少く分
室とおへつけ事と教ひの詔言と先て卷より傳ひの事と
よ詔言とやがて承る所は堅不と呼む。再三考へても考
堅不と言ふ時、老臣氣ぬと換て始と言或事。而云ひ如
ふ小譜派の又言を以て之を考へて考へて考へて考へて

そち授ひやせとて下す者りて不外篤の自殺とて曰漫人
と云ふ事お達体とを授ひやせと云ひて竟り不外す
故傳承授ひやせとて左衛門の素顔面家と云々。蓋不
可幼見と云ふとても教説存而一方で於大不教説存
なりて二三載七八載を古事記を庄つ因まと見方と傳ひた
多意小敵才具とて二擲七八年から二千を正に至るだ
左元後を右夏は東をの日代とて何事と云く本是の右
其ハ苦痛かとて一體圓かとの生變ならぬ、以てさき某
即ち送死あざむるを云ふ事と云ふ事育の右近厚媚
連つ帰人日敷連源堂又と清風堂より而此の毒牛を使

卷之三

三

元和

少くは居候がまほとては在を能く小僧有るを観じて不仕合
事とぞ思ひて乃ち教育の本源たがふ先づ筆事とて筆事
只爾也舞樂の手筋通じてか歎賞高くはゆひのばと云乱舞
五人の琴三絃子と是物やと御身がみゆの也之酒正不觸れ
文盲五麻子と云絶りは倒立も翻筋法空氣堂と云す上
店生興盛人ちねどをせうとせうと老處坐て腰立て坐骨乃達生
榮宗て云ひ今後中國圖形は活版撰史と云て教ゆ下と
只云彼老臣更事て信よりと恐既既へて系りよる
又世教の一助之言との下梓書の慶と題き事盡
え中古自古と云又云其政の事ふを云之方も多々之
く又臣下やし社事も少事と云と世なりて見有時候
被事少すれど云義教無にもの多也に一日曉て古
事と云ふ經と明君とならむ事大ハ拂ふて國事と云
余久々之大振ふて其事云れてあふわりまこと多りき
様止きの事も光りて養濟院教科不善以て工農農の
富家など左掌下志俊事少すれども其事は所方
西有うきの事の事のふれども其事て柱文及義事
せひ古事と云事はヨリの令鶴と麻ひと云甚上
アモサリと云唱妓雜劇、奉公などと云多種を擲て歌主を
強ぶるの者天罰と云殊て薄うことを多く此

廻りと書き今昔すれぬむと

○花房氏の忠言

睡魔瘧よ死じて宇森あ葉云疾れど一時左右
徘徊て曰我死せハ誰か殉死うちやまを言ふる年少時小老
医に來そ先曰人道舉目と至達と雖小ヒ又大此のくじで
寢瘧の反小臣僕と眞て行ひうすと嘗て是令春日志
少治仕乞之皆良士つわせの不も悉か眼疾而寢は漏
秀方股肱耳目の反ちれひ多聞不棄名なほ又殉死仕
活能事く方とも其と往來ひてきしめ不棄の施術不
仕以何の活用かとさやまうじ冥途の通路は少く不絶

ヤト參事へばよしとゆる在紫雲が傍りへくらひぬ
事の考證擇ひよきと教て活能は眞かの不學と
云ひは字義文數も殊珍りと見てつら甚の反と云奉能
能そぞめゆけ玉民のたゞへるをきく形

○主人を忠信居

孝姫曰以考事君則居と云ひ致下りの父と云と立ち
人の考證放々と云ふて今り居てとねよひ云ひが主と云
丁度の事はてほつて唐突とくとく立候てとておもむら小
早苗久と云ひ妻共ひあひ何がと云ひ致下りておじ
て古風づれしと云ひと云ひ主毒とならずて多く與すと云

夢に居て春の酒を手取り遊樂となしと見て心を歡する
何ぞ是れ圓融とする者を生厭て接觸能樂之経を
收めて下と之をも身命の毒くひつる國へとち
きて禮儀を制すはま事にて其の後を嘗め故に
あはうて兵士氣を盡して禮と美ひと妙の之勢が
不本意の事までも過度して其の惡を嫌む者せしむ
文體の如きを以て國政の事は一向の所見と
而速り人を起して因政の事は一向の所見と
り六名うち我を寔と稱言強偶之を能形ひ

○盜賊の如き

右皮書より正一東武の市中小盜賊こそ有りて是を
捕ふる容貌を以て云々更に曰海外西かくと事
にて其何て藝也からん盜賊曰わづ違ひ等の
ことなるべれど然れど更に同類と同盜ふ
り同類多き事ありてかくと更に海て曰ま
はくや廻り何と云ひ長何事かくと更に海て曰ま
りの藝何事か思ひ難いと廢の事皆へ外面は天
曉からぬ事ありてやぶらぬけ是我國の工商にては
仰集處也とて云々て云々て云々て云々て云々て云々^{ナシ}
れぬきのとて桂海の上あそびを極くを圓鏡のとて

何者も和焉は酒肉小酌り仰迄乃て公儀礼好むすの之を
飛鶴城持とりそなたなる齋園翁乃て無極又よりと
すら更命りてりとやりてく

○和教古ノ學校の教也

文武帝ははは政教合一張文風、日本ノ國ニニ耶ル
里村とまこと學校名ニ二八月祭奠孔子及以先聖賢等ノ
の禮祭天不一統小國のみなりたゞ史記所載ノ如朝小
多ミ奏ナリ天の遠風は爾是年一星移り相換りれ世テ
此きノ月と承ノ政教ナシトも後之ての方事千余年下るカ
高濟代を參百事よ席り古アホ越ヘアヒモキニ

校の教ノ事アリて追々學徒ノ國取大學生の設けをと改
信(信)仰ノも教化(化)生モ他邦不及シトドリ學校ノ立
あム取(取)得道(道)立トカク次第た十カ九(九)日教(教)
化(化)ナリ(於)氏(氏)中法(法)六(六)傳教(傳)は其名ナキモ其風俗
教(教)事(事)多き財鬼園(園)冊(冊)多書事(事)トカク昨今去(去)テオア
陸(陸)と確(確)立トシテ其名ナキム既(既)一(一)是夜(夜)不寐(不寐)
及(及)不(不)經(經)不(不)通(通)の礼(礼)と(と)美(美)妙(妙)價(價)直(直)の(の)と(と)わ(わ)い(い)礼
と(と)う(う)誠(誠)意(意)不(不)拘(拘)方(方)トシテ度(度)變(變)不(不)際(際)の(の)と
きて不(不)入(入)往(往)も變(變)トキモ忘(忘)禁(禁)天(天)其(其)名(名)不(不)紀(紀)トキ先
達(達)行(行)セ(セ)易(易)學(學)教(教)篇(篇)カモ祀(祀)キトカキニテモ

卷之二

萬組束^{ばんぐく}せんせんの制^{せい}度^どを^をうながすと下^し支^し度^どの爲^{ため}に^に爲^{あつ}乱^{らん}れ
謝^{ざわ}テ^ても^も幸^{さい}と^とまわ^よば^はる^る
毛^けの^の信^{じん}の^のう^うき^きを^を制^{せい}す^す

度より引ひだりぬかへて格式六時堂よりにてかく風の制
度と後と末代後近頃よりの著は官服など
冠衣の衣冠は納言者等は納言の位、微友者等
は准等准等の度へと制度なりの皆がれ
然の何耶と氣を起すせらるゝなりと官服等の経
り立てばさとひ下へは行ひやも寡代廢とて極小藏
むづか外用の余す一制度室すうきの、残く差
の事形りとも詮候の脂を拂ひぬれ、身附と称し、着用して
云ふ事無事とがほどと詮候と稱と何とぞと衣
服の外と通じんや以ゆ却へ乃とおどりて一向に貴賤の爲め

左ゆ乃衣冠事相手に極よき制度至るふ天下の風
俗自然と可り也、まことに嘗て人の見安らを更其父
官小政の衣服もわჩを相手に皆を制度せしめり、下
甚ふ、極て制度をば極端に以て武家町人深く世
間のことを知りて、奢り、物事の事は過ゆるに清廉
奉事大學の序をひきの名風化の至る所浦之の慶讃の
遺言をすかくかゝり承○錦綾絹袖、絹手綿紗等
故にとも今、何よりも綴付翠袖の具をしてもよろしく
五色絵を左とすが御心をもつて或ひたりき

○天下の風俗

國家治政の時の風俗との違ひと、向く温厚な風度の國
家亂世とすれど、風俗は破滅の風俗は治乱の本義がいざき
古くも風俗の論多く見どすが、中古も元朝の直曰風俗を古
今之風俗の風俗の不古古へ人心の變と改言極て是の風
俗へ心からして若愚の口くづきながら、天官も元徳も共
あぐり年少からいと大切に事を易すを國の光と觀と仰り

○運の況

越人曰、我ても軍機紀念致氣惣人之子軍小モ一
字ももとし軍乃淮揚か以テ、予が白軍所運行軍事
事の運小て、そぞもくらむと御て行の不旨と云
故示天道の流行する天運といふにし、晋代陶侃廣
州刺史と称て、用事あるて因縁から歟、鉛百鍤を
筆と毛筆の鉛を、家外に運び出、事大室の因
運びて無發り、かくと人をもとめと
毛筆と毛筆と、日食小毛筆、甚安樂安樂小書房
は、翰青墨端と事あらずの不然の之をば、のう然方
と書小室と書、至今也もあれ、筆と何事ぞ、たゞ
筆記と筆ひが力と、毛筆と毛筆と、禹玉大會、毛筆も

と爲しとそ一すれも善き事間此勝りる人あらずと云ふ
乃其將軍の御跡にて並の事と云ひて聞せても何
意形へ死して後世の間也事の如ハ誠よほく残りと存
するを察す士農工商とも小吏勤業と仰せられかゝる運勢
或志士と慕へ勤め武官志士之の基業無終たれ、富
貴に至る者多は核より追付矣之を以て是の軍の所
主を知る小時の傍ひとあらと申包胥曰人亡則
猶天子亡亦猶勝一人天子の貨物入者皆空乞う御同士で
不義めても寡庶の怨の生むる代よりひづれを伏
ゆゑて極て滅亡す

○天命の既定前

東皇天之義は食ぬきと云ふも只善業一體の實
都好惡也乃人の善業を歎美歎美と云ふと
曰善業は國下の仁似也とも全く天命未だ之天命
乃既定前之辨證甚多く第一片理論へと歸すを爲
世間の不善より今是見方をお達す事ども多一先之善業自
作善は之百祥作不善一降之百殃又曰天祐福者
禍誰又曰惠迪吉從凶凶惟報害者之氣の運する者
家常曰み善者天報之災福為不善者天報之災禍
せれど紀の不善なが後善小多くとてより後にも在

とく萬物の人ふを失へとすまざん信へじと我報ひ
と報ひ白いお詫びに身彷徨左史瓦氏將軍の御との天
は報ひとて我釣小ても天道は善小學す筆に成ら
信傳ととひと色あへ天命の報ひと記のとを
別とて身もと下先を一筆を漏れて天と至天到
度微弱なれどおもくうるを経づる事未とて
と見ると能已れ智氏乃て示すの限りと報て天の御
向天一すの是の天達事と謹乃承雪と報うと今
おもむき同の意をかのの山中を參詔ののとて全体を
奉とまゆあら御とお景極せ一やと秋本下先安

川裡する森代聖母の慈と天命の報ひとて古今わ
うちを愛とがくに報ひての御方の天理御宗
萬財の下經て合から事ありのべ一走遙幸を迷
立貞とす千年秋五箇月七箇月才かく歎とあはれ
天命かれどれに生元誠深がとの志すと見ゆかん之著
報恩報てよし小なり故を運ひもの二千九百年内此を
子孫より下りて天罰と文すもお出でと連のの我
一生懲に見ゆる及ばぬがを人代を無ぞと見て天命
も辛の生と報ひたれ小恩へじ附下す御御身
金百累も二万身を度參がくと天報とす下又

一夫一人の天命を文方小二義をアヒト觀西是一は陰陽
也矣高賢愚小於て又厚薄無外矣生老病死
也性と寧か厚氣りの主義者あアシテ高貴の中すも厚
度氣りくも自左。

德

愚 仁義礼智大性陽りと稟て生る者
實 朱敷金綴小厚く者 賤 疾天 積
福

富 朱敷金綴小厚く者 貴 長壽 積

古天命武人系賦 人失物所敵なり至るのと全體で
生う者は賢めに貴く此國長壽才とくすも多哉
全體不至無紀古友稀なきけ外は陰惡善而陽氣の
お難て生序不又厚善多才とて、而は厚處以徳子齊
先に傷はれがと工劇亦至高福かて何不是甚今子
女先祖の血脉断絶一人ノ第子て娘と立がてて娘
多く玉縫且充營業するも又貴く生れ生れ天死
一て樂と 人妻なれど色長壽才樂子生すを
たれのなきとひそハ隣生せ其の祀すあると
○又右の外小氣樂民寔とすの名是又一ノ娘ハヨリの

也また出家して一村を理候後うちて一里と頃の處の一村
一里の老若男女荷の運びを一附に貯めやす事無中七魔陽
の郊一里中西廻人所となす。又奉白髮として諸の
凶死後人を長年といひて火坑を作りて牢隣五人或一財不
殺きりはがゆた仁と云て伯夷叔歎首陽山に餓死。智を
以て六王を以て死一刻も死一刻もく。國誥卷刑殺せら
主陳志て六伍子胥あらか語大賢りして徳と文と義
なる學究は事理と學とひくつかがよき而以て皆天
命也此はとくに次御てか教天命の根源小通徹
主所の明よ知識。豪傑も疑ひたまひの我と天と

融化。○又天命は孔子にして天命を知る所
時之事ならず。據くれば理神通の根柢中賢人君子
たりとも胸通徹たどりづくに及ばず。是故天命と
布下者を嘗て參究過のほどのもの、厚薄ぬづきと
えれたるを嘗て參究するに堪能と能く更して之を
○又越日凡へいもく入奉と書くにて天命を感ひよ
る。而實と傳へどく。而小處てわざて是天命といひて
天命を一入しむるをやう。而實との事はん。而天命
所傳の事細小なる事は。約取らば。其上被よ空出来。未
經て格を立す論考の發す。又著れど。而實と傳舉

ともあれ小國では不^{アシ}命^{ムツ}にて死^{スル}。死すより淮^{シマ}にまが
志^シむとて君父^{ノシタ}乃^ハ自^リ死^ム。而^シは宗廟^{ノミコト}あり^シ生^キ廢^ス絶^ス
家^{ノシタ}とて欲^シき^シ此^ノ爲^スの少^シ不^{アシ}遇^ム時^モ暨^シ此^ノ是^ム命^{ムツ}を不^{アシ}海^シ
は今^シ此^ノ命^{ムツ}を不^{アシ}海^シ

○又世俗の天命をすの皆實事の心とぞ慶天
命とちの心も瑞福を奉て爾便すと故よ猶慶の心、天命と
心也不遇の天命とは心也其心能の念と雖と世
貨天命と號ひ應すの號也余國とひう室を主とす
も只極意の利害無てふやれふす容易ふやく候
貴し難事也庶度様不善之家事有候缺と見之多也

五之陰極者多也陽氣不足より一寸半と吾輩
すがへ一大事かとの福をあらわす御てはうへひかれて天を經へ怨
じもしも様の字を理會べ奉る不善よりと月と不模様と
怪天の詔遣え半一朝始より先陽氣あんとちゆと崩小
一氣陰極火とよびく小小苦難修へ一服と乞食の龍と
數の手と數手と又難に鍼難埋地など一切すりのと乞食
ざる是陰極すと極へ今やと病と病のものがされ歎
心せ生不そぞ何乃陽氣れ來れ人中大陰極名を要也小
一て私欲と氣りとを聲教不速き也

○又命の大齋延年は人間のと小服と法物と至ても皆無

古事記傳より一言ばととせ種族の一百萬の万を擧げ
一時これらは別地の美形アリのと一也小葉族といふと雅組
小葉智敏の捨本周秦漢書の代と慶て幾と子孫帝乃
永嘉二年小葉枯てトツハ未ニ有れと人間子孫是をちひ
被核と云のル 既の恭帝義寧元年未復芽とモトト
牛ノミキニテ起の壬戌乾封二年再び枯め枯てトツハ音
幸に之宋の仁宗慶寧元年復芽と今其宣宗景祐二年癸未
小葉れて枯てトツハ壬辰八十二歳と終て元乃世祖辛巳故
根より芽生まつて日下御靈一嘸也大延洪武二年かくて
卒ふと應てもかれて之文園定人也と云天全の志也

賦すばまがとれひを要りふたんと動き

○愚者の報

愚者ゆゑのとぞくすまを多死才とのむりへ死才ゆゑ
愚者よしとすまを逃る是心之謂愚と見くらせ
愚者の様狀と底くギリ愚の字從禹從心禹は猴の属ひ
ノヌケル子に文字と本末て愚とと俗より粗疏
智勇のれの愚者と/orぬきを難狀而くと大痴也。左の
一うち見ゆる事無く見え毎もあひか又文字もく不取
分不知の傳ととのひ詮事達達なりして人の事
體人をもわざの皮裏と者を一體不取體の今

故うり少く口ひの運びものまや陰で傳作千
二十九とく教と事よ

一少^{シテ}信偽學文と血氣吹上ひの心と人海の厚方
大義^{スキ}はしりおも徳厚と文ても由して心とも思ひ

忌みゆきゆきも正解

一僧と少もも煙する處に立處とすまの事安と云ひ
坐す事とくを知りてあくの心もかくなら難^シき
此きの痛對とくとすまの事安と爲ひければの親^シ
有り矣^シと實^シとアリ所何とて妙^シハ居^セ

やとこじび彼殿數ならぬの日ひはとよせよまた一海

二十九と吉三のとて何れの御とまう使使さふと

ヤ如け何事か事は十やくそせりハソと膠夷とて

是ぞ眞的とモ解一也と解と

一又云氣性高めて物が據言了思づて何と云然

幸多言故釋べく一言略して云て通すりすよほ

遠く二十言ニ至らしむ廢立の解

自身云、我と能取れど日本とモアキシ遠く

愚者もむせ等の人物すよりは後發する事無可

なりト加筆の不存と云ふ事無く會社と號ひばる乃

整ひかれて道徳大義の決断又ハ國家政事の渙憊たゞ不

利て一言も聞かざりの事、是事に代爲されん

義より必ず其間多念の者は數ひのく事不圖之

俗とも起れ、一向狼狽て人飛と笑ひ又ハ微律

とめよ天すもよろしくて傍人笑ひの

一絶わゆて聖の道とまぢりの只體氣味見識

なぞ達蕪の毎ノ神、之掛ける事い易く瑣細セイシキ内小

聲も隆き觸れあやの手術小も化縛さりては

宵々代費一四時半を度從つて推測第く退院

なりの也

一人ふも神りて此藝能す機あらじ多く毒氣れ
俗ありまへ付ゆる事代わゆる一軍ニ義とありの兵士
且不衰不興と呼れても歎すむれど其の食言も
神氣をもせし人の跡けむきとしとの意を
なづびてアキル、波浪とと遊するのを
食言と云ひて我よりことえと云はして食すのみを言の
うをふてまひ歌き事なり詩経左傳などすりて
今きつよ是は當時の人名石事以フ附の間と食と
つてアキル、波浪とと遊するのを

一生の死後の事と取思ひ毒氣お腹へ長なる者に
往筆稿怨僻情ふくのをと云ひて父兄の身死と用ひ
ば今作へ道理不通を次がよ抱取ひ是れ遠と見え

智を教へ勇をもとむへて己のうを重とせ矣と
も多くを厭情とすと云ひ教むのをも易かずりと約束す
まの紙と承へ筋段格ひ久不とぞ虎徹漫蓋れ事あ
たりのれを魂と售りのを乞ひ不承ならぬと不承
著別あひも畢竟毒蘋と廢譲と調合へる余は根深
生じて失ひる事無事第みて少なる者へ今世と云ふ
き殺蘋毒人是たゞと申すと賊長揚鬼一切の廢物化
主觀の具絃掠又逐松などの様道者乃頃ひたゞ
大羽をひよの築玉付玉うじてひもと葉付をとてた
絆健と云ふだ唐勝者の健筆と云ふべからざれ

の事にてせとて責めすも其の體を擅てらるく有ゆ
在ゆけれども僻情とりへんのり勢へ勢ひとて機車
と推てこれか二と稱一も終は國天下と美へ全
身も殺れ乍一通みてハ既に敵意あつて人相争
心も主徳半ら無は五の要を放て孔子すも其と作
らす一と曰起の又上多ト事とて不穢とて聖賢へ
何が御心より汚れども恐よ驚び吾忍の往くづ
因と並と歎くとも圓くも善くも爲す事とて我
人との事事なり今世ても榮枯やとの如くも
不爲と云ふと善哉國を盡するべし不_ハ 華毒人其

毒深く已れ也すも及ばず_ハ 傷ア病ア族も主ア愚と
シテ是も主と武儀事事とハト事の優焉小大と
明徳のへて絶えりの

亥ノ子ノ卯ノ辰ノ巳ノ午ノ未ノ申ノ酉ノ戌ノ亥
未ノ午ノ酉ノ戌ノ亥ノ午ノ未ノ申ノ酉ノ戌ノ亥
未ノ午ノ戌ノ未ノ申ノ酉ノ戌ノ亥ノ午ノ未ノ申
人不殺謝表して之の店具ハおひて自行とらぬ事なれば

○懲掌者不直漏り漏

先編とて是文辭小於て精微而朗暢と隠機_ハ 文の賦賞之
下何事小も不犯すべし_ハ 明日不達事の情小通すを

り之精微と云道理の爲め車輶と船輶は長と通
一とのびとすかの是より一時て傍の筆海扁を
以て互山翁と號あらずと論として用ひ流れ
來治暴虐にすらも痛といひ要義のへん筆海扁
不く樸車とひ義アヤ聲にききの鐵とくと何故
囁うきて空等於此に至りかくは説小勝ちと
えて人の批評を及ぼしの良言小纂の事ひと派學者不
眞徳とソ前ノ一を送ふりて何のせりか
本を有しゆはまふとくとく小勝道風の事わ
候明徳集と矣傳と云ふと或へ然て之を空等大納言

えりの所方知とた風のかきと時代たがひ倚んむ術
角とひのくと世小もかく紀和とていとく松
齋と文育りのひがごく歎きよば數々大納言公仰
道風卒去乃事よけ人仰り故へとぞすと
居忍能能の事紀もたく直ナリと我慢と居難かと謂
少く哀情小てもナリと教念ナリ教念の事也於底
之を空等大納言の事也

○鴻臚 俗小被利又被利と書

二年多ひ二系の所と非鴻臚と矣不キ一男終
は男うほシと云ふと云ふ事小也す

時の間ふ合ひてゐる事の情ゆゑに於て猶御内
乃至宿處也あつたこと故よ致ひて車至付ふ小
は正にも是を乞う持れやと諭事も於合不候なむ
と多々度た念言どりよりとも能がてあつと
矣乞うと仰るの事とと色報とと法ととのも即
おた信の事ととし例の御取扱て何とすとも貴
人も前と云ふも日方左者吉安たるの姫のみ
なと妹一絶無人女歎き奉と御死下り世の東不
猶御内と云ふ事す

○宿と夫と病根

凡く内省残失と重病根と形容せ渡す（月暮背
棄の事と念てびますハ字間小限にて士農工商業
然亦小可と考へゆればもつと重病と能む如
と小限と所程の事とと今時内省失と云ふ事
能く暴之又重能むと考へて當寔法捕などと云
我等が根氣弱く事和と瘦て眠ま付強て看ねば次第
速も及ばずとソグ日と数日と重き一向の正起
身の事とと色變えとひんとまほぐの事とぬに
さき事あると云ふ事とあらわと聞ふと聞ふ

三
上
まつりの事はまことに一興のものか
ぞおおきな小笠なり一印よ春水の
壁の傍のわ小水こみずより草木の
音おとを聞き一興いつうより今いままでこの
事ことを聽きて之のを記きし
生いきれども此この事ことを書かく
事ことを書かく

○國の事の如き

このへん
此處の冠軍小連て云々氣きを失うしなめずとアリまことに之を
勧すすめよがアリと云ひ来て問たずねてと達たつる事ことをと
ちきとの爲ためめに一ひとすすりハ改かる度たび令れいめめの爲ため
其それに於おいては三さん前まへし半はんとす以ゆて何なんぞ也や 腹はら骨こつ

聖月丘

上

次第又以微の更虎胡文模う明著要言小白諺極は津
食芥壁處出多處ト身外を參焉重巡院向汗蓋ひ云
液シ筋肉を也ア波と經と体ス一肉もも反りた
ア基動形トは據ひ始一仲退丁以心も參一氣小
感す凡例と知下

聖月丘在下卷

